

佐賀市 35 歴史探訪

いにしへのドングリ

佐賀県立博物館の屋外展示場に大きく茂った一本の「アラカシ(※)」の樹。一見何の変てつもない樹のようですが、実は、この樹が縄文時代からおよそ四千年の時を経て私たちの眼前に現れたという、古代ロマンあふれる由来の樹であることをご存じでしょうか。

昭和42年(1967年)に佐賀県西有田町で「坂の下遺跡」の発掘調査が行われ、「アラカシ」の実が大量に出土しました。持ち帰った実をガラス容器に入れ保管していたところ、そのうちの 하나가翌年突然発芽したというのです。当時、四千年の眠りからさめた「縄文アラカシ」として全国的に大きな話題となりました。

では、なぜ大量のアラカシが出土したのでしょうか。

実は、アラカシの実をはじめ、いわゆるドングリなどの堅果類は、クリやクルミとともに縄文時代において重要な食糧源でした。秋に拾い集められたドングリは、地面を掘って造った「貯蔵穴」という施設に、生のまま一時的に保管され、必要に応じて食べられていたのです。

ドングリをはじめとする植物質の食糧は調達しやすい上に高カロリーの食べ物だったことから、縄文人の食生活を支えるものでした。以前は縄文時代の生活は狩猟・漁労中心のイメージで考えられていましたが、近年の研究により、実は植物採集に大きく依存する生活をしていたと考えられるようになりました。

さて、発芽したアラカシですが、その後鉢植えした状態で育て続けられ、誰でも見るようにと、昭和50年に現在の場所に本植えされました。現在では高さ10mほどの立派な大樹に成長し、毎年たくさんのドングリを実らせています。もしもこの実が縄文時代に発芽していたら、今と同じように多くのドングリを实らせ、縄文人の大切な食糧となっていたことでしょう。

博物館に訪ねられた折には、この「縄文アラカシ」の樹の下で、縄文人のドングリ拾いの風景を思い浮かべてみるのも楽しいですよ。

※アラカシ(粗榿)…ブナ科の常緑高木

一口メモ

この「縄文アラカシ」に実ったドングリから育った苗木が「縄文アラカシII世」と名付けられ、親木の近くで大事に育てられています。



▲発芽したアラカシの実



▲よみがえった縄文アラカシ

